

学校いじめ防止基本方針

大阪府立泉鳥取高等学校

2020年7月9日

第1章 いじめ防止に関する本校の考え方

1 基本理念

いじめは、その子どもの将来にわたって内面を深く傷つけるものであり、子どもの健全な成長に影響を及ぼす、まさに人権に関わる重大な問題である。全教職員が、いじめはもちろん、いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為も絶対に許さない姿勢で、どんな些細なことでも必ず親身になって相談に応じることが大切である。そのことが、いじめ事象の発生・深刻化を防ぎ、いじめを許さない生徒の意識を育成することになる。

そのためには、学校として教育活動の全てにおいて生命や人権を大切にする精神を貫くことや、教職員自身が、生徒を一人ひとり多様な個性を持つかけがえのない存在として尊重し、生徒の人格のすこやかな発達を支援するという生徒観、指導観に立ち指導を徹底することが重要となる。本校では、めざす学校像として、

『生徒の持てる力や可能性を最大限伸ばす「生徒が主役の学校」
を掲げており、

- 1 地域やグローバルな世界を『たくましく生き抜く力』の基となる「豊かな人間性」の涵養
- 2 地域やグローバルな世界を『たくましく生き抜く力』の基となる「確かな学力」の定着
- 3 将来の生き方をデザインし、自ら学び続けることができる生徒の育成
- 4 自ら学び続ける教師集団の確立

を目標としている。そのため、人権教育にも重点を置いて取り組んでおり、いじめは重大な人権侵害事象であるという認識のもとに、ここに学校いじめ防止基本方針を定める。

2 いじめの定義

「いじめ」とは、生徒等に対して、当該生徒等が在籍する学校に在籍している等、当該生徒等と一定の人的関係にある他の生徒等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった生徒等が心身の苦痛を感じているものをいう。

具体的ないじめの態様は、以下のようなものがある。

- 冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- SNS等のインターネット上で、誹謗中傷や嫌なことをされる 等

3 いじめ防止のための組織

組織を置くことで、いじめについては、特定の教職員で問題を抱え込まず学校が組織的に対応することにより、複数の目による状況の見立てが可能となる。また、スクールカウンセラー等の活用により、より実効的ないじめの問題の解決を図る。

(1) 名称

「いじめ防止対策委員会」

(2) 構成員

校長、教頭、首席、生活指導部（部長・学年主担）、各学年主任、
養護教諭、人権教育推進委員長、教育相談委員会から 1 名、人権教育推進委員会から 1 名

(3) 役割

ア 未然防止

- いじめの未然防止のため、いじめが起きにくい・いじめを許さない環境づくりを行う役割

イ 早期発見・事案対処

- いじめの早期発見のため、いじめの相談・通報を受け付ける窓口としての役割
- いじめの早期発見・事案対処のため、いじめの疑いに関する情報や児童生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う役割
- いじめに係る情報（いじめが疑われる情報や児童生徒間の人間関係に関する悩みを含む。）があった時には緊急会議を開催するなど情報の迅速な共有、及び関係児童生徒に対するアンケート調査、聴き取り調査等により事実関係の把握といじめであるか否かの判断を行う役割
- いじめの被害児童生徒に対する支援・加害児童生徒に対する指導の体制・対応方針の決定と保護者との連携といった対応を組織的に実施する役割

ウ 学校いじめ防止基本方針に基づく各種取組

- 学校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正を行う役割
- 学校いじめ防止基本方針における年間計画に基づき、いじめの防止等に係る校内研修を企画し、計画的に実施する役割
- 学校いじめ防止基本方針が当該学校の実情に即して適切に機能しているかについての点検を行い、学校いじめ防止基本方針の見直しを行う役割（PDCA サイクルの実行を含む。）

4 年間計画

本基本方針に沿って、以下のとおり実施する。

泉鳥取高等学校 いじめ防止年間計画				
	1 年	2 年	3 年	学校全体
4月	学校いじめ防止基本方針の内容を生徒、保護者へ周知 個人面談 高校生活支援カードによって把握された生徒状況の集約 人権HR（いじめを考える）・いじめアンケート(校内独自) 人権HR 事後学習（いじめアンケートの検証等）	学校いじめ防止基本方針の内容を生徒、保護者へ周知 個人面談	学校いじめ防止基本方針の内容を生徒、保護者へ周知 個人面談	第1回 いじめ対策委員会（年間計画の確認、問題行動調査結果を共有） 「学校いじめ防止基本方針」のHP更新
5月				PTA総会で「学校いじめ防止基本方針」の趣旨説明
6月	保護者懇談週間 （家庭での様子の把握）	人権問題に関する映像鑑賞 （差別を考える） 映像についての事後学習 （振り返り） 保護者懇談週間 （家庭での様子の把握）	人権HR（差別をなくすために） 保護者懇談週間 （家庭での様子の把握）	
7月	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施 いじめアンケート実施 第1回ケース会議（教育相談委員会） インターンシップ（社会性の育成）	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施 いじめアンケート実施 第1回ケース会議（教育相談委員会） 職場体験実習（社会性の育成）	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施 いじめアンケート実施 第1回ケース会議（教育相談委員会） HR（ストレス・コントロールを学ぶ）	アンケート回収箱の設置 第2回委員会（進捗確認）
8月				
9月	人権問題に関する作文課題			
10月	作文課題についての事後学習 校外学習 第2回ケース会議（教育相談委員会）	人権問題に関する作文課題 校外学習 作文課題についての事後学習 第2回ケース会議（教育相談委員会）	校外学習 第2回ケース会議（教育相談委員会）	上半期のいじめ状況調査 第3回委員会（状況報告と取組の検証）
11月	人権問題に関する映像鑑賞 映像についての事後学習 （振り返り） 保護者懇談週間 文化祭	保護者懇談週間 文化祭	保護者懇談週間 文化祭	
12月	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施	アンケート「安全で安心な学校を過ごすために」実施	アンケート回収箱の設置
1月				教職員人権研修
2月				第4回委員会(年間の取組の検証)
3月				保護者の許諾を得た生徒について、クラス編成に係る訪問を中心とした中学校への聞き取り調査の実施

5 取組状況の把握と検証（PDCA）

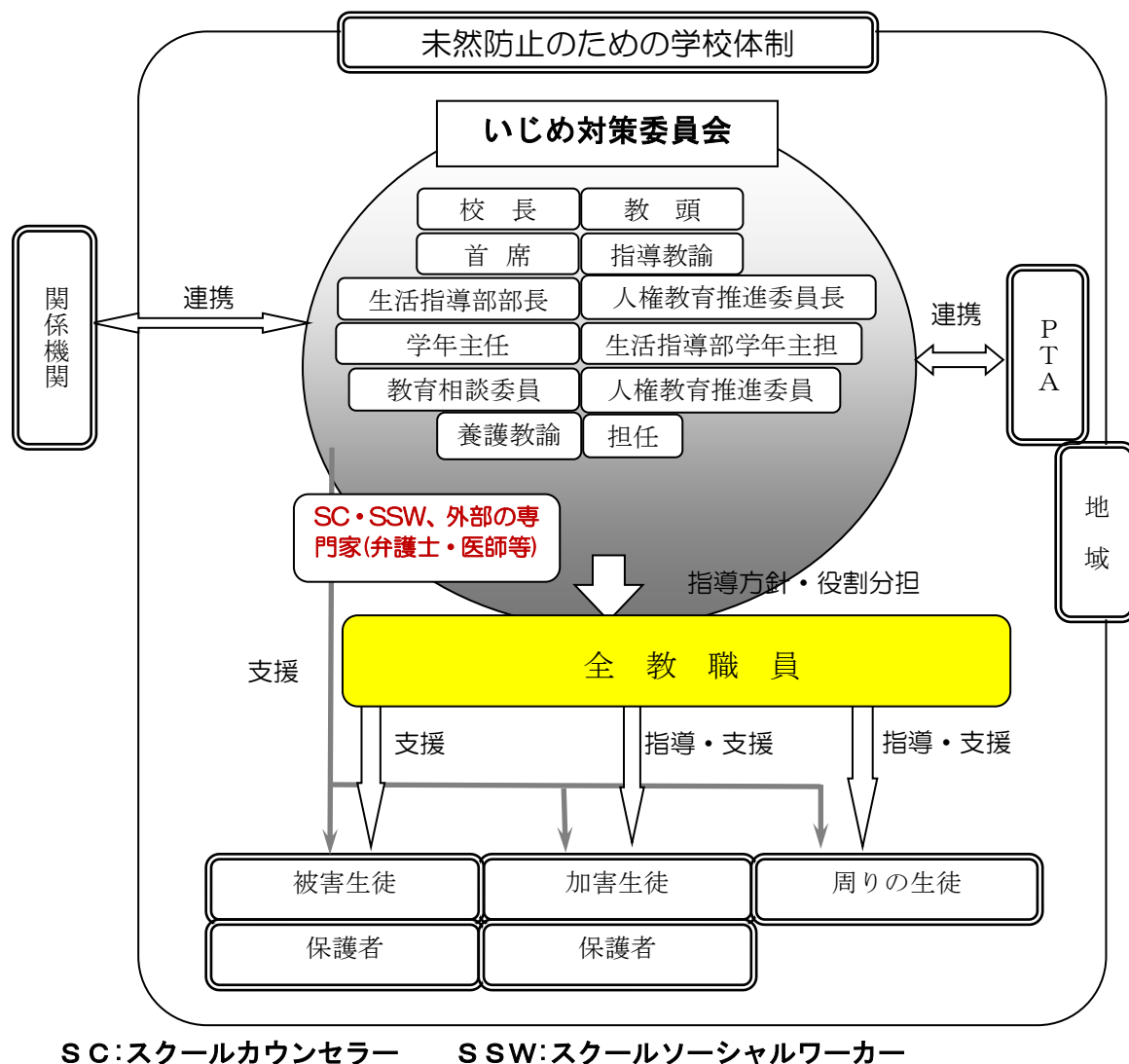
いじめ防止等の取組の実施状況を学校評価の評価項目に位置付けるとともに、いじめ対策委員会は、一学期に2回、二学期に1回、三学期に1回で年4回、会議を開催し、取組みが計画どおりに進んでいるか、いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証、必要に応じた学校基本方針や計画の見直しなどを行う。

第2章 いじめ防止

1 基本的な考え方

いじめの未然防止にあたっては、教育・学習の場である学校・学級自体が、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。そのことを基盤として、人権に関する知的理解及び人権感覚を育む学習活動を各教科、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じ、総合的に推進する必要がある。

特に、生徒が、他者の痛みや感情を共感的に受容するための想像力や感受性を身につけ、対等で豊かな人間関係を築くための具体的なプログラムを作成する必要がある。そして、その取組みの中で、当事者同士の信頼ある人間関係づくりや人権を尊重した集団としての質を高めていくことが必要である。



2 いじめの防止のための措置

- (1) 平素からいじめについての共通理解を図るため、校内研修を実施する。また、教職員一人ひとりに様々なスキルや指導方法を身につけさせるなど教職員の指導力やいじめの認知能力を高めるための研修や、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等を講師とした研修を実施する。さらに教職経験の浅い教職員に対しては、校内でのOJTが円滑に実施されるよう配慮する。
生徒に対しては、「いじめは人として絶対に許されない」との意識を、学校教育全体を通じて、生徒一人ひとりに徹底する。また、情報モラル教育の充実に努めるとともに、継続的な指導と個に応じた支援を充実させる。
- (2) いじめに向かわない態度・能力を育成するために、自他の存在を認め合い、尊重し合える態度を養うことや、生徒が円滑に他者とコミュニケーションを図る能力を育むことが必要である。
そのために、生徒が自分自身を価値ある存在と認め、大切に思う「自尊感情」を感じとれ、他人を敬う心を持てるように、体育祭や文化祭、クラスマッチや校外学習、クラブ活動などの主体的な活動の取組みを実施する。
- (3) いじめが生まれる背景を踏まえ、指導上の注意としては、日頃から生徒が発する危険信号を見逃さないようにして、いじめの早期発見に努める。また、個人面談等を通して、生徒の悩みや保護者の不安を積極的に受け止める。
分かりやすい授業づくりを進めるために、少人数展開授業をはじめ、各授業の充実に図り基礎基本の定着に努める。また、ICTを活用し、学ぶ楽しさを味わえるわかる授業を展開する。
生徒一人ひとりが活躍できる集団づくりを進めるために、一人ひとりを大切にする集団づくりを目標とするホームルーム活動を実施する。また、クラブ活動により健全な趣味や豊かな情操を養うとともに、自主的・実践的な態度を育む。
いじめの背景にあるストレス等の要因に着目し、その改善を図り、ストレスを感じた場合でもそれを他人にぶつけるのではなく、運動・スポーツや読書などで発散したり、誰かに相談したりするなど、ストレスに適切に対処できる力を育む。
いじめを助長するような教職員の不適切な認識や言動等、指導の在り方に注意を払うため、教職員が生徒に対して愛情を持ち、生徒に寄り添う学級経営や教育活動を展開する。
- (4) 自己有用感や自己肯定感を育む取組みとして、授業をはじめ学校生活のあらゆる場面において、他者と関わる機会を増やし、それぞれの違いを認め合う仲間づくりを行うことによって、「自分が認められた」という経験をさせる。また、平素から、教職員から笑顔で声掛けを行い、生徒との良い人間関係を保ちながら、校内における生徒の居場所の確保のための工夫を継続する。
- (5) 生徒が自らいじめについて学び、取組む方法として、いじめ問題を生徒自身が主体的に考え生徒自身がいじめの防止を訴えるような取組みを推進（生徒会によるいじめ撲滅の宣言や相談箱の設置など）する。

第3章 早期発見

1 基本的な考え方

いじめの特性として、いじめにあっていて生徒がいじめを認めることを恥ずかしいと考えたり、いじめの拡大を恐れたりするあまり訴えることができないことが多い。また、自分の思いをうまく伝えたり、訴えたりすることが難しいなどの状況にある生徒が、いじめにあっていて場合は、隠匿性が高くなり、いじめが長期化、深刻化することがある。

それゆえ、教職員には、何気ない言動の中に心の訴えを感じ取る鋭い感性、隠れているいじめの構図に気づく深い洞察力、よりよい集団にしていこうとする熱い行動力が求められている。

早期発見のために、平素から教職員と生徒との信頼関係の構築に努める。いじめは、気づきにくいところで行われ、潜在化しやすいことを認識し、教職員が生徒の小さな変化を敏感に察知し、生徒が発する危険信号を見逃さないようにして、いじめの早期発見に努める。

また、生徒に関わる情報を教職員の間で共有し、保護者とも連携して情報を収集する。

2 いじめの早期発見のための措置

- (1) 実態把握の方法として、定期的なアンケートは、安心していじめを訴えられるよう無記名にするなど工夫し、学期ごとなどの節目で生徒の生活や人間関係の状況を把握できるよう、年度当初に計画を立て実施する。また、生徒との面談等に役立てる。
定期的な教育相談としては、生徒相談室や保健室や学年職員室の利用、電話相談窓口について広く周知する。
日常の観察として、休み時間や放課後の雑談の中などで生徒の様子に目を配り、交友関係や悩みを把握したり、個人面談や家庭訪問の機会を活用したりする。
- (2) 保護者と連携して生徒を見守るため、平素から生徒の学校の様子について連絡しておき、保護者がいじめに気づいた時に、即座に学校に連絡できるよう、保護者との信頼関係を気づいておく。
- (3) 生徒、その保護者、教職員が、抵抗なくいじめに関して相談できる体制として、校長を中心に全教職員が一致協力体制を確立しておく。「いじめ対策委員会」で情報を共有し、組織的に対応し、いじめがあった場合の組織的な対応を可能とするよう、平素からこれらの対応の在り方について、全ての教職員で共通理解を図る。
- (4) 学校だよりや学年通信等のプリント、ホームページ等により、相談体制を広く周知する。
学校教育自己診断や学校協議会等により、適切に機能しているかなど、定期的に体制を点検する。
- (5) 教育相談等で得た生徒の個人情報については、その対外的な取扱いについて、方針を明確にし、適切に扱う。

第4章 いじめに対する考え方

1 基本的な考え方

いじめにあった生徒のケアが最も重要であるのは当然であるが、いじめ行為に及んだ生徒の原因・背景を把握し指導に当たることが、再発防止に大切なことである。近年の事象を見ると、いじめた生徒自身が深刻な課題を有している場合が多く、相手の痛みを感じたり、行為の悪質さを自覚したりすることが困難な状況にある場合がある。よって、いじめた当事者が自分の行為の重大さを認識し、心から悔い、相手に謝罪する気持ちに至るような継続的な指導が必要である。いじめを受けた当事者は、仲間からの励ましや教職員や保護者等の支援、そして何より相手の自己変革する姿に、人間的信頼回復のきっかけをつかむことができると考える。

そのような、事象に関係した生徒同士が、豊かな人間関係の再構築をする営みを通じて、事象の教訓化を行い教育課題へと高めることが大切である。

具体的な生徒や保護者への対応については、(別添)「5つのレベルに応じた問題行動への対応チャート」を参考にして、外部機関とも連携する。

2 いじめ発見・通報を受けたときの対応

- (1) いじめの疑いがある場合、ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階からの確に関わる。
遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止めたり、生徒や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあったりした場合には、真摯に傾聴する。
その際、いじめられた生徒やいじめを知らせてきた生徒の安全を確保するよう配慮する。
- (2) 教職員は一人で抱え込まず、速やかに学年主任や分掌長等に報告し、「いじめ対策委員会」と情報を共有する。その後は、当該組織が中心となって、速やかに関係生徒から事情を聴き取るなどして、いじめの事実の有無の確認を行う。
- (3) 事実確認の結果、いじめが認知された場合、管理職が教育庁に報告し、相談する。
- (4) 被害・加害の保護者への連絡については、家庭訪問等により直接会って、より丁寧に行う。
- (5) いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認められるときは、いじめられている生徒を徹底して守り通すという観点から、所轄警察署と相談し、対応方針を検討する。
なお、生徒の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに所轄警察署に通報し、適切に援助を求める。

3 いじめられた生徒又はその保護者への支援

- (1) いじめられた生徒が落ち着いて教育を受けられる環境を確保し、いじめられた生徒に寄り添い支える体制をつくる。その際、いじめられた生徒にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、「いじめ対策委員会」が中心となって対応する。状況に応じて、スクールカウンセラーの協力を得て対応を行う。

4 いじめた生徒への指導又はその保護者への助言

- (1) 速やかにいじめを止めさせた上で、いじめたとされる生徒からも事実関係の聴取を行う。いじめに関わったとされる生徒からの聴取にあたっては、個別に行うなどの配慮をする。
- (2) 事実関係を聴取した後は、迅速にいじめた生徒の保護者と連携し、協力を求めるとともに、継続的な助言を行う。
- (3) いじめた生徒への指導にあたっては、家庭訪問や別室指導等個別に指導する機会を設け、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめた生徒が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該生徒の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。
その指導にあたり、学校は、複数の教職員が連携し、必要に応じてスクールカウンセラーの協力を得て、組織的に、いじめをやめさせ、その再発を防止する措置をとる。

5 いじめが起きた集団への働きかけ

- (1) いじめを見ていたり、同調していたりした生徒に対しても、自分の問題として捉えさせる。そのため、まず、いじめに関わった生徒に対しては、正確に事実を確認するとともに、いじめを受けた者の立場になって、そのつらさや悔しさについて考えさせ、相手の心の悩みへの共感性を育てることを通じて、行動の変容につなげる。

また、同調していたりはやし立てたりしていた「観衆」、見て見ぬふりをしていた「傍観者」として行動していた生徒に対しても、そうした行為がいじめを受けている生徒にとっては、いじめによる苦痛だけでなく、孤独感・孤立感を強める存在であることを理解させるようにする。

「観衆」や「傍観者」の生徒は、いつ自分が被害を受けるかもしれないという不安を持っていることが考えられることから、すべての教職員が「いじめは絶対に許さない」「いじめを見聞きしたら、必ず先生に知らせることがいじめをなくすことにつながる」ということを生徒に徹底して伝える。

- (2) いじめが認知された際、被害・加害の生徒たちだけの問題とせず、学校の課題として解決を図る。全ての生徒が、互いを尊重し、認め合う集団づくりを進めるため、担任が中心となって生徒一人ひとりの大切さを自覚して学級経営するとともに、すべての教職員が支援し、生徒が他者と関わる中で、自らのよさを発揮しながら学校生活を安心してすごせるよう努める。

そのため、認知されたいじめ事象について地域や家庭等の背景を理解し、学校における人権教育の課題とつなげることにより教訓化するとともに、いじめに関わった生徒の指導を通して、その背景や課題を分析し、これまでの生徒への対応のあり方を見直す。その上で、人権尊重の観点に立ち、授業や学級活動を活用し、生徒のエンパワメントを図る。その際、スクールカウンセラーとも連携する。

体育祭や文化祭、校外学習等は生徒が、人間関係づくりを学ぶ絶好の機会ととらえ、生徒が、意見が異なる他者とも良好な人間関係を作っていくことができるよう適切に支援する。

6 ネット上のいじめへの対応

- (1) ネット上の不適切な書き込み等があった場合、まず学校として、問題の箇所を確認し、その箇所を印刷・保存するとともに、「いじめ対策委員会」において対応を協議し、関係生徒からの聞き取り等の調査、生徒が被害にあった場合のケア等必要な措置を講ずる。
- (2) 書き込みへの対応については、削除要請等、被害にあった生徒の意向を尊重するとともに、当該生徒・保護者の精神的ケアに努める。また、書き込みの削除や書き込んだ者への対応については、必要に応じて、大阪法務局人権擁護部や所轄警察署等、外部機関と連携して対応する。

- (3) また、情報モラル教育を進めるため、教科「情報」において、「情報の受け手」として必要な基本的技能の学習や「情報の発信者」として必要な知識・能力を学習する機会を設ける。

7 いじめ解消の定義

いじめが「解消している」状態については、少なくとも次の2つの要件が満たされている必要がある。

- (1) いじめに係る行為が止んでいること

被害者に対する心理的又は物理的な影響を与える行為が止んでいる状態が相当の期間継続していること。(相当の期間：少なくとも3か月を目安)

- (2) 被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないこと

被害児童生徒本人及びその保護者に対し、心身の苦痛を感じていないかどうかを面談等により確認する。

また、上記のいじめが「解消している」状態とは、あくまで、一つの段階に過ぎず、「解消している」状態に至った場合でも、いじめが再発する可能性が十分にあり得ることを踏まえ、教職員は、当該いじめの被害児童生徒及び加害児童生徒については、日常的に注意深く観察を行う。

第5章 その他

1 いじめ防止対策委員会を有効に活用させるために特に留意する点

- (1) 特定の教職員で問題を抱え込まず学校が組織的に対応し、複数の目により生徒を見守る。

また、些細な兆候や懸念、生徒からの訴えを抱え込まず、または、対応不要であると個人で判断せずに、直ちにすべてを組織に報告・相談する。

- (2) 必要に応じて、心理や福祉の専門家である、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、弁護士、医師、警察官経験者など外部の専門家が参加しながら対応するなど、より実効的ないじめ問題の解決に資する。

- (3) 学校いじめ防止基本方針に基づく取り組みの実施や学校いじめ防止年間計画の作成に当たっては、保護者や生徒の代表、地域住民の参加を図ることに努める。

2 いじめ対策会議

いじめ事象が発覚した際に召集する。様々な側面から指導方針を検討し、情報の共有を図る。

構成メンバーは、管理職・首席・生活指導部(部長・学年主担)、人権教育推進委員会(推進委員長、委員1名)、教育相談委員会(委員1名)、当該生徒のクラス担任・副担任、当該学年主任とする。